

伊豆の踊子

川端康成

新潮文

いす おどり こ
伊豆の踊子



定価 180 円

新潮文庫 草 1 B

昭和二十五年八月二十日 発行
昭和四十二年八月十日 五十五刷改版
昭和五十五年六月二十日 八十九刷

著 者
川 端 康 成

発 行 者
佐 藤 亮 一

発 行 所
株 式 会 社 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛て送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

◎ 印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Hideko Kawabata 1950 Printed in Japan

新潮文庫

伊豆の踊子

川端康成著



新潮社版

115

目次

伊豆の踊子……………七

温泉宿……………四一

抒情歌……………五三

禽獣……………三五

注……………一五三

解説 三島由紀夫

伊豆の踊子

伊豆の踊子

一

道がつづら折りになって、いよいよ天城峠あまぎとうげに近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓ふもとから私を追って来た。

私は二十歳、高等学校の制帽をかぶり、紺飛白こんがすりの着物はかまに袴をはき、学生カバンを肩にかけていた。一人伊豆の旅に出てから四日目のことだった。修善寺温泉しゅぜんじに一夜泊り、湯ヶ島温泉に二夜泊り、そして朴ほ齒おぼの高下駄で天城を登って来たのだった。重なり合った山々や原生林や深い溪谷の秋に見惚とれながらも、私は一つの期待に胸をときめかして道を急いでいるのだった。そのうちに大粒の雨が私を打ち始めた。折れ曲った急な坂道を駆け登った。ようやく峠の北口の茶屋に辿たどりついてほっとすると同時に、私はその入口で立ちすくんでしまった。余りに期待がみごとに的中したからである。そこで旅芸人の一行が休んでいたのだ。

突っ立っている私を見た踊子が直ぐに自分の座蒲団を外して、裏返しに傍へ置いた。

「ええ……」とだけ言って、私はその上に腰を下した。坂道を走った息切れと驚きとで、「ありがとう」という言葉が咽のどにひっかかって出なかったのだ。

踊子と真近に向い合ったので、私はあわてて袂たもとから煙草を取り出した。踊子がまた連れの女の

前の煙草盆を引き寄せて私に近くしてくれた。やっぱり私は黙っていた。

踊子は十七くらいに見えた。私には分らない古風の不思議な形に大きく髪を結っていた。それが卵形の凛々しい顔を非常に小さく見せながらも、美しく調和していた。髪を豊かに誇張して描いた、稗史的な娘の絵姿のような感じだった。踊子の連れは四十代の女が一人、若い女が二人、ほかに長岡温泉の宿屋の印半纏を着た二十五六の男がいた。

私はそれまでにこの踊子たちを二度見ているのだった。最初は私が湯ヶ島へ来る途中、修善寺へ行く彼女たちと湯川橋の近くで出会った。その時は若い女が三人だったが、踊子は太鼓を提げていた。私は振り返り振り返り眺めて、旅情が自分の身についたと思った。それから、湯ヶ島の二日目の夜、宿屋へ流して来た。踊子が玄関の板敷で踊るのを、私は梯子段の中途に腰を下して一心に見ていた。——あの日が修善寺で今夜が湯ヶ島なら、明日は天城を南に越えて湯ヶ野温泉へ行くのだろう。天城七里の山道できつと追いつけるだろう。そう空想して道を急いで来たのだったが、雨宿りの茶屋でびったり落ち合ったものだから、私はどぎまぎしてしまったのだ。

間もなく、茶店の婆さんが私を別の部屋へ案内してくれた。平常用はないらしく戸障子がなかった。下を覗くと美しい谷が目の届かない程深かった。私は肌に粟粒を拵え、かちかちと齒を鳴らして身顫いした。茶を入れに来た婆さんに、寒いと言うと、

「おや、旦那様お濡れになってるじゃございませんか。こちらで暫くおあたりなさいまし、さあ、お召物をお乾かしなさいまし」と、手を取るようにして、自分たちの居間へ誘ってくれた。

その部屋は炉が切ってあって、障子を明けると強い火気が流れて来た。私は敷居際に立って躊躇した。水死人のように全身蒼ぶくれの爺さんが炉端にあぐらをかいているのだ。瞳まで黄色く腐ったような眼を物憂げに私の方へ向けた。身の周りに古手紙や紙袋の山を築いて、その紙屑のなかに埋もれていると言ってもよかった。到底生物と思えない山の怪奇を眺めたまま、私は棒立ちになっていた。

「こんなお恥かしい姿をお見せいたしました……。でも、うちのじじいでございますから御心配なさいますな。お見苦しくても、動けないのでございますから、このままで堪忍してやって下さいまし」

そう断わってから、婆さんが話したところによると、爺さんは長年中風を患って、全身が不随になってしまっているのだそうだ。紙の山は、諸国から中風の養生を教えて来た手紙や、諸国から取り寄せた中風の薬の袋なのである。爺さんは峠を越える旅人から聞いたり、新聞の広告を見たりすると、その一つをも洩らさずに、全国から中風の療法を聞き、売薬を求めたのだそうだ。そして、それらの手紙や紙袋を一つも捨てずに身の周りに置いて眺めながら暮して来たのだそうだ。長年の間にそれが古ぼけた反古の山を築いたのだそうだ。

私は婆さんに答える言葉もなく、囲炉裏の上にうつむいていた。山を越える自動車が家を揺すぶった。秋でもこんなに寒い、そして間もなく雪に染まる峠を、なぜこの爺さんは下りないのだろうかと考えていた。私の着物から湯気が立って、頭が痛む程火が強かった。婆さんは店に出て旅

芸人の女と話していた。

「そうかねえ。この前連れていた子がもうこんなになったのかい。いい娘あんこになって、お前さんも結構だよ。こんなに綺麗になったのかねえ。女の子は早いもんだよ」

小一時間経つと、旅芸人たちが出立つらしい物音が聞えて来た。私も落着いている場合ではないのだが、胸騒ぎするばかりで立ち上る勇気が出なかった。旅馴れたと言っても女の足だから、十町や二十町後おくれたって一走りに追いつけると思いながら、炉の傍そばでいらしていた。しかし踊子たちが傍にいなくなると、却って私の空想は解き放たれたように生き生きと踊り始めた。彼等を送り出して来た婆さんに聞いた。

「あの芸人は今夜どこで泊るんでしょう」

「あんな者、どこで泊るやら分るものでございますか、旦那様。お客があればあり次第、どこにだって泊るんでございますよ。今夜の宿のあてなんぞございますものか」

甚はなはだしい軽蔑を含んだ婆さんの言葉が、それならば、踊子を今夜は私の部屋に泊らせるのだ、と思った程私を煽り立てた。

雨脚が細くなつて、峰が明るんで来た。もう十分も待てば綺麗に晴れ上ると、しきりに引き止められたけれども、じっと坐っていられたかった。

「お爺さん、お大事になさいよ。寒くなりますからね」と、私は心から言つて立ち上った。爺さんは黄色い眼を重そうに動かして微かすかにうなずいた。

「旦那さま、旦那さま」と叫びながら婆さんが追っかけて来た。

「こんなに戴いては勿体のうございます。申訳ございません」

そして私のカバンを抱きかかえて渡そうとせず、幾ら断わってもその辺まで送ると言って承知しなかった。一町ばかりもちよこちよこついで来て、同じことを繰り返していた。

「勿体のうございます。お粗末いたしました。お顔をよく覚えて居ります。今度お通りの時にお礼をいたします。この次もきっとお立ち寄り下さいまし。お忘れはいたしません」

私は五十銭銀貨を一枚置いただけだったので、痛く驚いて涙がこぼれそうに感じているのだが、踊子に早く追いつきたいものだから、婆さんのよろよろした足取りが迷惑でもあった。とうとう峠のトンネルまで来てしまった。

「どうも有難う。お爺さんが一人だから帰って上げて下さい」と私が言うと、婆さんはやっこのことでカバンを離れた。

暗いトンネルに入ると、冷たい雫^{しやく}がぼたぼた落ちていた。南伊豆への出口が前方に小さく明るんでいた。

二

トンネルの出口から白塗りの柵に片側を縫われた峠道が稲妻のように流れていた。この模型の

ような展望の裾の方に芸人達の姿が見えた。六町と行かないうちに私は彼等の一行に追いついた。しかし急に歩調を緩めることも出来ないので、私は冷淡な風に女達を追いついてしまった。十間程先きに一人歩いていて男が私を見ると立ち止った。

「お足が早いですね。——いい塩梅に晴れました」

私はほっとして男と並んで歩き始めた。男は次ぎ次ぎにいろんなことを私に聞いた。二人が話し出したのを見て、うしろから女たちがばたばた走り寄って来た。

男は大きい柳行李を背負っていた。四十女は小犬を抱いていた。上の娘が風呂敷包、中の娘が柳行李、それぞれ大きい荷物を持っていた。踊子は太鼓とその杵を負うていた。四十女もぼつぼつ私に話しかけた。

「高等学校の学生さんよ」と、上の娘が踊子に囁いた。私が振り返ると笑いながら言った。「そうでしょう。それくらいのことは知っています。島へ学生さんが来ますもの」

一行は大島の波浮の港の人達だった。春に島を出てから旅を続けているのだが、寒くなるし、冬の用意はして来ないので、下田に十日程いて伊東温泉から島へ帰るのだと言った。大島と聞くと私は一層詩を感じて、また踊子の美しい髪を眺めた。大島のことをいろいろ訊ねた。

「学生さんが沢山泳ぎに来るね」と、踊子が連れの女に言った。

「夏でしよう」と、私が振り向くと、踊子はどきまぎして、

「冬でも……」と、小声で答えたように思われた。

「冬でも？」

踊子はやはり連れの女を見て笑った。

「冬でも泳げるんですか」と、私がもう一度言うと、踊子は赤くなって、非常に真面目な顔をしながら軽くうなずいた。

「馬鹿だ。この子は」と、四十女が笑った。

湯ヶ野までは河津川の溪谷に沿うて三里余りの下りだった。峠を越えてからは、山や空の色までが南国らしく感じられた。私と男とは絶えず話し続けて、すっかり親しくなった。荻乗や梨本なぞの小さい村里を過ぎて、湯ヶ野の藁屋根が麓に見えるようになった頃、私は下田まで一緒に旅をしたいと思い切って言った。彼は大変喜んだ。

湯ヶ野の木賃宿の前で四十女が、ではお別れ、という顔をした時に、彼は言ってくれた。

「この方はお連れになりたいとおっしゃるんだよ」

「それは、それは。旅は道連れ、世は情。私たちのようなつまらない者でも、御退屈しのぎにはなりますよ。まあ上ってお休みなさいまし」と無造作に答えた。娘達は一時に私を見たが、至極なんでもないという顔で黙って、少し羞かしそうに私を眺めていた。

皆と一緒に宿屋の二階へ上って荷物を下した。畳や襖も古びて汚なかった。踊子が下から茶を運んで来た。私の前に坐ると、真紅になりながら手をぶるぶる顫わせるので茶碗が茶托から落ちかかり、落すまいと畳に置く拍子に茶をこぼしてしまった。余りにひどいはいにかみようなので、

私はあっけにとられた。

「まあ！ 厭らしい。この子は色気づいたんだよ。あれあれ……」と、四十女が呆れ果てたという風に眉をひそめて手拭を投げた。踊子はそれを拾って、窮屈そうに畳を拭いた。

この意外な言葉で、私はふと自分を省みた。峠の婆さんに煽り立てられた空想がぼきんと折れるのを感じた。

そのうちに突然四十女が、

「書生さんの紺飛白はほんとにいいねえ」と言って、しげしげ私を眺めた。

「この方の飛白は民次と同じ柄だね。ね、そうだね。同じ柄じゃないかね」

傍の女に幾度も駄目を押してから私に言った。

「国に学校行きの子供を残してあるんですが、その子を今思い出しましてね。その子の飛白と同じなんですもの。この節は紺飛白もお高くてほんとに困ってしまう」

「どこの学校です」

「尋常五年なんです」

「へえ、尋常五年とはどうも……」

「甲府の学校へ行ってるんでございますよ。長く大島に居りますけれど、国は甲斐の甲府でございましたね」

一時間程休んでから、男が私を別の温泉宿へ案内してくれた。それまでは私も芸人達と同じ木